

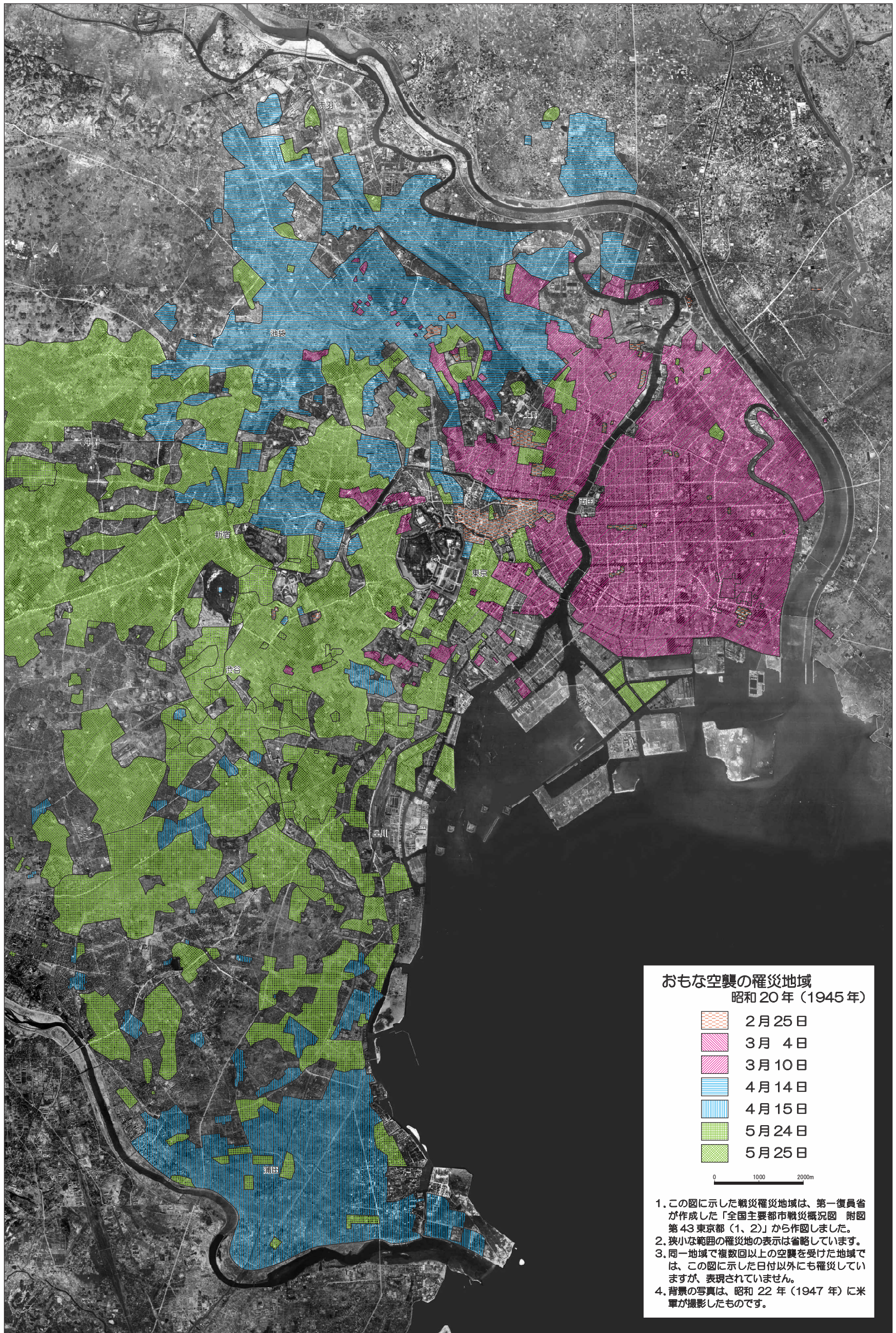
昭和はじめの東京市とその周辺



大正12年（1923年）の関東大震災で甚大な被害を受けた東京は、「帝都復興」のかけ声のもと、昭和のはじめには都市機能を回復しました。東京市（旧東京市：明治22年（1889年）誕生）は、昭和7年（1932年）に周辺82町村を編入して、ほぼ現在の23区を範囲とする市域に拡大しました（当時は35区を設置）。

この地図では、合併前の旧東京市（15区）が表示されています。また、旧東京市の外側を回るように掘削された荒川放水路（現在の荒川、昭和5年（1930年）完成）や、秋葉原駅で山手線と交差する総武線（昭和7年（1932年）、御茶ノ水・両国間が開通）などが描かれています。さらに、「下町」を中心に水路が縦横にめぐらされている様子を見とることができます。

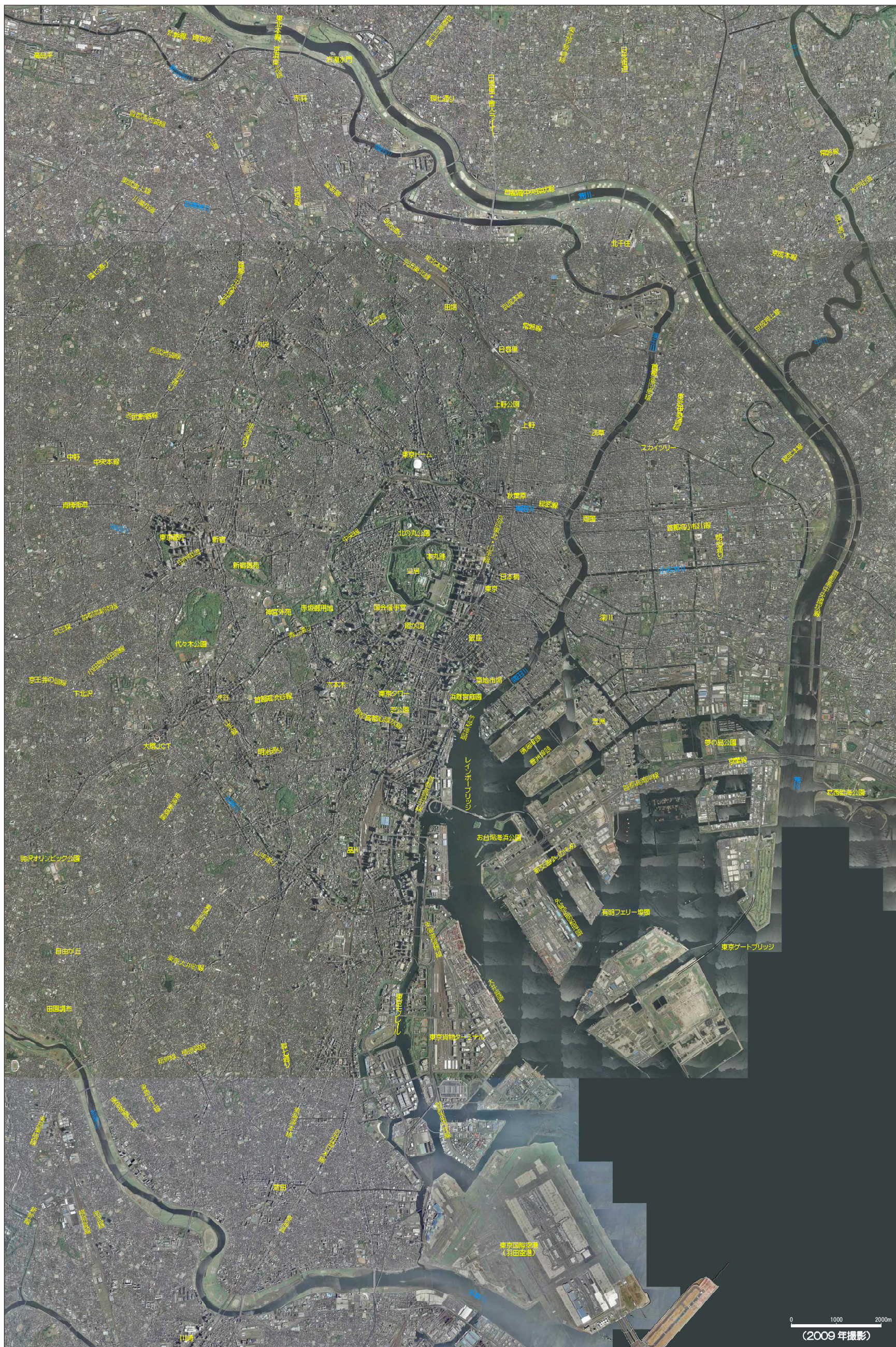
東京の戦災概況



昭和17年(1942年)4月18日の最初の空襲以降、東京は約90回にも及ぶ空襲によってほぼ全域が壊滅状態となりました。その被害は、内務省の調査によると死者88,250名、負傷者62,106名、全焼壊家屋851,166戸、半焼壊家屋8,217戸、罹災者2,578,150名に及んでいます(数字は「戦災復興誌」)。このうち最も被害が大きかったのは、昭和20年(1945年)3月10日の空襲で、「下町」方面のほとんどが焼失し、一夜にして8万人以上が命を失っています。5月24日から25日にかけての空襲では、三宅坂の陸地測量部庁舎も焼失し、地図原版をはじめ貴重な測量成果が灰燼に帰しました。

写真は、昭和22年(1947年)に米軍が撮影したもので、復旧あるいは応急的に建設された住宅等が見られる一方、戦災当時そのままに焼け跡が残っているところも随所に見られます。

世界有数の大都市「東京」へ



戦災により大きな被害を受けた東京では、戦火がおさまると人々は、それぞれに雨露を凌ぐ住居をはじめ営業用あるいは歓楽用の建物等の復興にとりかかりました。その結果、駅前広場などにいわゆる「ヤミ市」が立ち、土地の不法占拠、不法建物の建築等により、混乱状態となりました。政府は「戦災地における建築物等の制限に関する法律（昭和21年勅令389号：通称“バラック令”）」を公布し、都市計画に基づく復興に着手しました。

東京の復興事業は、土地区画整理事業の一環として、膨大な戦災ガレキで河川を埋め立て、宅地を造成するところから始まりました。自動車社会の到来を受けて、首都高速道路の建設は、昭和39年（1964年）の東京オリンピック開催に合わせて拍車がかかりました。高度経済成長期には都市のインフラ整備が次々に行われ、湾岸の埋め立て地やいたるところに高層ビルが立ち並ぶようになりました。こうして東京は世界有数の大都市へと発展してきました。

米軍が撮影した戦後の東京



米軍撮影空中写真 M44A-5LT-73 (1946年2月撮影)

東京湾の上空から、東京都の東部地域を撮影しています。中央の大きな掘割は荒川（当時は荒川放水路）です。荒川と左側の隅田川にはさまれた墨田・江東地域を中心に、空襲による焼け跡が広がっているのがわかります。右側の蛇行した河川は江戸川で、手前の旧江戸川河口付近の左側が葛西、右側が浦安です。現在このあたりは、埋め立て・開発が進む臨海地帯へと変貌しています。ディズニーランドは右側手前の川の中州に作られました。